

『日本の雇用システムと労使関係—戦後史論』をめぐって

木本喜美子

(0) はじめに

労働と家族の社会学

1980 年代：自動車産業労働者調査 *木本 [1995]、[2004]、宮下・木本 [2010]

2005 年から：織物業・既婚女性労働者調査+地方圏・非正規を中心とした若者調査

(1) 正規雇用-非正規雇用関係という分析軸の意味

正規雇用下層と無期雇用非正規との類似性=正規雇用中心主義②の構造が大きく変わりつつある(61 頁)

←トップとボトムの間介在する諸階層の配置構造

←諸アクターの布置連関

→→成人男性を担い手とする「正規」を基軸層としてできあがった雇用システムに「非正規」をどのように包摂し、いかに再構築するのかという課題を明確にするため?

(2) 「“女性雇用問題” という括りの通用性」について

・女性正規労働者：

日本的雇用システムの確立期において、「もうひとつの正規雇用」=短期正規雇用が維持された(36 頁)/ 近年「もう一つの正規雇用」(=福祉職、長期勤続の一般職女性)が、無期非正規雇用労働者と類似性をもつにいたった(64 頁)

・女性非正規：

製造業を中心とする女性パート化の展開=臨時工の代替

・・・80 年代を通じて定着したのは、女性雇用=非正規という通念であった(51 頁)

「年功賃金制度の変容、正規雇用—非正規雇用関係の変容は、女性雇用諸制度の変革を促す・・・」女性雇用問題 “という括りの通用性は低くなっている”(60 頁)

※「女性の(雇用)労働は二次的なものだ」という社会的信念 [佐藤香・元治恵子, 2015 : 135 頁]

Ex. 既婚女性パートに対する社会的信念 (高梨昌説=「生活苦ではないがもっと収入が欲しい」) が有力となった VS. 不安定就業論 (51-2 頁)

VS. 他方では、日本では家事労働は「取るに足りないものとして、ぞんざいに扱われ続けてきた」 [品田 2007]

→→ “女性雇用問題” という括りをどう考えるか？

(3) 階層性および地域性について

60年代のパートの主力は、日本的雇用システムに包摂され始めていた男性ブルーカラー労働者の妻 (36頁)

←日本的雇用システム形成・定着期における「もう一つの正規雇用」層としての小零細企業労働者の存在

←既婚女性が大企業「家族賃金」体制下 (=妻働かず体制) におかれた地域と、継続就業した地域と

※1960年代後半から、電機、衣服工業を中心に工業の地方分散化・・・農家女性の農外就業化 (多就業化)

→→こうした階層性、地域性を踏まえたとき、1980年代の地域労働組合運動 (54頁) の射程はどのように捉えることができるか？

<参考文献>

ジャネット・ハンター (阿部武・谷本雅之監訳) 『日本工業化と女性労働-戦前期の繊維産業-』 有斐閣, 2003=2008年

木本喜美子 『家族・ジェンダー・企業社会-ジェンダーアプローチの模索-』 ミネルヴァ書房, 1995年.

木本喜美子 「家族と企業社会-歴史的変動過程-」 (渡辺治編 『変貌する<企業社会>日本』 旬報社)、2004年.

宮下さおり・木本喜美子 「女性労働者の1960年代-『働き続けること』と『家庭』とのせめぎあい-」 (大門正克ほか編 『高度成長の時代1-復興と離陸』), 大月書店, 2010年.

佐藤香・元治恵子 「戦後復興期の女性労働者」 (橋本健二編 『戦後日本社会の誕生』 弘文堂, 2015年.

品田知美 『家事と家族の日常生活』 学文社, 2007年.